2020年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

生活文化学科　長崎 勤

② 事業名

インクルーシブ保育での障害児の子供との関わりのアセスメントと支援プログラムの開発

②　事業の目的

障害児(ASD)と定型発達児の子供の関わりにおける特有なブレークダウンの様相を明らかにするアセスメント方法を開発する。また実際にアセスメントを行い、その結果をもとにブレークダウンに対応する保育者支援プログラムを開発する。

＜方法＞

1. 対象児:

1) 自閉症スペクトラム T 児:5 歳。T 児は私立保育園年長児クラスに在籍している。観察開始時の発達年齢は 3 歳 6 ヶ月程度。新型コロナの感染拡大に伴い当初毎月 1 度の保育園訪問を計画していたが、新型コロナウイルスの感染による緊急事態宣言により、外部者の観察が困難になったが、比較的感染が減少した、7 月、11 月、2 月に観察を行った。また、大学での指導場面でのピア役の大学生とのゲームでの相互交渉も分析することとした。

2) 自閉症スペクトラム M 児:5歳。M 児は O 特別支援学校幼稚部(3 歳から 5 歳の年齢混合クラス) に週 2 日通園し、区立 C幼稚園の年長クラスに週 1,2 回在籍。新型コロナの感染拡大に伴い、M 児の幼稚園の観察が許可されなかったために、同じく幼稚部の H 児(自閉症児、4 歳)との子供同士の関わりについてのアセスメントと支援に研究方法を変更した。朝の自由遊び(1 時間前後)について、2020 年 7 月～9 月に 3 回の観察を行い、アセスメントを行い、アセスメントに基づき、支援を行い、その経緯を 10 月～2021 年 2 月まで、月 1 回程度の観察を行った。

2. 観察・分析方法:

1) 子供同士の関わり方の定量的分析(タイムサンプリング):幼稚園、保育園での朝9 時からの自由遊び場面を中心に観察をしながら、60 分間について 3 分間隔のタイムサンプリングを行う。タイムサンプリングは、3 分間ごとの観察期間に、対象児から保育者(T)へ、対象児から他児(C)へ、保育者(T)から対象児へ、他児(C)から対象児への 4 つの関わりの方向性に分け、それぞれ注視(L)、身体(P)、言語(V)、物(O)の、どのモダリティーで関わりが見られたかを観察する。

2) 子供同士の関わり方の質的分析(エピソード分析):保育場面での子供間でのコミュニケーションの破綻(以下、ブレークダウン)を起こした会話・相互交渉のエピソードについて「ブレークダウンの先行条件としての共有の水準(後述)→ブレークダウンの様相→保育者の介入方法→ブレークダウンの修正」の一連のプロセスを分析しブレークダウンの発生要因とその回復・修正での保育者の役割について検討を行う。そのためにブレークダウンを含むエピソードを次の「SS1-B1-I-B2-SS2」の枠組

みで考える。
SS1：文脈の共有の水準（Sharing Situation（SS））；子供同士の文脈、ストーリー、スクリプト、エピソードの共有の水準を 5 段階で評価した。
B1：ブレークダウンの生起：a.情動調整不全（行動・言語×自己・相互）の 4 通りの組み合わせ、b.離脱・無視、c.指示に従わない、d.拒否などのカテゴリーによって評価した。
情動・意図状態（BE）：a.情動調整不全（行動・言語×自己・相互）4 通りの組み合わせ、b.自分の意図が伝わらない、c.相手の意図が伝わらない、d.その他
行動形態（BB）：a.離脱、b.参加しない・協同活動しない等、c.T に援助を求める、d.その他
I：保育者の支援・調整的介入（Intervention）a.情動調整不全への対応（行動・言語×自己・相互）、b. 情動調整不全の原因の言語での説明（目標、役割について）、c.共同注意を促す、d.注意、叱責、e.指示の繰り返し、f.意図に沿った身体援助、などのカテゴリーによって評価した。
b.相互の意図が伝わらない場合の代弁（モデル提示）、c.情動調整不全の原因についての言語での説明（目標、役割について）、d.共同注意を促す、e.注意、叱責、f.指示の繰り返し
B2：ブレークダウンの変化；B1 と同様。
→（BE）a-1～4、b-1.2、c-1.2、d その他、（BB）a-1.2、b-1.2、c 問題解決の方略を獲得する、d その他、SS2：共有の水準（Sharing Situation（SS））；SS1 と同様。
保育者の支援が、B2：ブレークダウンの変化、SS2：共有の水準の変化にどのように影響しているかを分析した。
<u>3）支援方法の検討</u>：子供同士の関わりについてアセスメントの結果を、保育者に提供し、保育場面での子供同士の関わり方についての支援方法を協議し、支援方針を立てる。その支援方針によって保育を実施し、その結果・効果についても検討した。

③事業実績・研究成果（具体的に）
<u>1）T 児</u>：
<u>（1）子供同士の関わり方の定量的分析（タイムサンプリング）</u>：60 分間の自由遊び時間について 3 分間のタイムサンプリング法によって分析を行った。7 月から T 児は他児に関心を示し、観察時間ほとんど他児を注視していた。11 月からは、他児からの注目が増えるようになる。11 月から他児への言語、他児からの言語的働きかけが増加し、2 月には他児への言語、他児からの言語的働きかけは 80%前後になっていた。
<u>(2)子供同士の関わり方の質的分析（エピソード分析）</u>：子供同士の関わりにおけるブレークダウンの際の、「情動・意図状態」と「行動形態」の変化では、7 月には、相手の意図が伝わらなく、また情動調整不全もいくつかの場面で見られたが、11 月には自分の意図が伝わらないことによるブレークダウンが増加した。ブレークダウンの際の行動形態は、7 月には「参加しない」ことが大部分であったが、2 月には保育者に援助を求めるようになるが、子供同士の関わりには参加しない状態は残っていた。
　ブレークダウンの際の保育者による子供への支援は、7 月に見られた「身体援助」や「指

示の繰り返し」が、11 月、2 月にかけて徐々に減り、「共同注意の促し」や「T 児の意図を説明する代弁」が増加した。

保育者の支援後の共有の水準（SS1→SS2）は、7 月には「やや低い」から「やや高い」が増加し、11 月には「普通」から「やや高い」が増加した。2 月には「普通」から「やや高い」、「高い」共有の水準へと変化していった。このように、保育者と研究者との協議・助言による保育者への支援によって、子供同士の関わりにおける共有の水準の変化そのものが、徐々に変化していった。子どもの変化と、保育者の変化、また助言者との協議・助言の要因が相互的に関連していた(transactional)ものと考えられ、これらの要因を配慮したインクルーシブ保育での支援の方向性が示唆された。

(3) 観察・分析のアセスメントに基づく保育者との協議・助言（コンサルテーション）：タイムサンプリングの量的な分析、またエピソード記録・分析の質的な観察・分析を元に、支援の方向を園長・担任と協議した。7 月には、保育士が積極的に T 児と他児との媒介することが必要な時期であることを助言した。11 月には、保育者が T 児の意図の説明（代弁）を行うことで、T 児による代言模倣を促すことが必要であることを助言した。

2) M 児：7 月から 9 月の 3 回の観察に基づくアセスメント結果と支援の途中経過を示す。

(1) 子供同士の関わり方の質的分析（エピソード分析）：子供同士の関わりにおけるブレークダウンを起点としたエピソード 8 件（7 月 31 日 3 件、9 月 7 日 2 件、9 月 28 日 3 件）を収集し、①各エピソードについて、カテゴリー項目に該当する行動に分解・対応させ、②カテゴリーの下位項目の比率を検討した結果、M 児の同じクラスの 4 歳のH 児との「ブレークダウン前の共有の水準（SS1）」と「保育者の介入後の共有の水準（SS2）」を比較したところ、SS1→SS2 にかけて、共有の「やや低い」が減少し、「普通」の比率の増加し、「高い」が出現していた。その際の保育者の支援・調整的介入の仕方の分析では、相手の意図が伝わらない場合の言語的な代弁が 75%と多かった。

その結果、ブレークダウンの変化では、情動・意図状態は、自分の意図が伝わらない（100%）から自分の意図が伝わる（25%）へと変化し、行動形態でも参加しない(100%)から問題の方略を獲得する(38%)へと変化を示した。

「保育者による共有の促し(Ip)」では、モデル提示・言語指示が 3/4 を占めており、前年度にダウン症の S 児について保育園で行った観察での「指示の繰り返し」が 1/5 程度を示していた結果と対照的で、M 児とH 児の保育者のポジティブな特性が示された。

(2) 観察・分析のアセスメントに基づくコンサルテーション：これらの観察・分析結果から、幼稚部教員との協議から、M 児と H 児への支援の方向性が検討された。教員からの距離を置いた代弁が多かったが、M 児の代弁模倣にはなりにくい傾向が見いだされたことから、教員が、M 児の代弁模倣によって H 児への明確化要求を促す、橋渡し役を、積極的に行う方向性が確認された。M 児とH 児が遊ぶことができる「ストラックアウト」ゲーム

によって、役割交代、他児の行為や結果への関心を促すこととした。その結果、役割交代はスムースにできるようになり、他児の行為や結果に、コメントする様子も見られはじめた(支援を継続中)。

④ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

＜図書＞

長崎 勤・田島信元・吉井勘人（編著）(2021)食育を通したコミュニケーション発達支援－「カルピス」づくりによる支援プログラム－福村出版(印刷中)

＜学術論文＞

吉井 勘人・若井広太郎・中村　　晋・森澤 亮介・長崎 勤(2020)自閉スペクトラム症児における意図共有を伴う協同活動の獲得過程:特別支援学校の授業における共同行為ルーティンを通して. 発達心理学研究、第 31 巻第 3 号,1-10.

兵藤瑞穂・若井広太郎・吉井勘人・板倉達哉・長崎勤(2020)保育場面の自閉症スペクトラム幼児と他児・保育者との関わりのアセスメントと支援方法の基礎的研究―子ども・保育者との相互交渉に関するタイムサンプリングを中心に―実践女子大学教職課程年報第 3 号、47-56.

＜学会・研究会発表＞

長崎勤・杉山志津枝・伊藤和佳・板倉達哉・吉井勘人(2020)双方向メディア（Zoom）を用いた発達支援・実習の試み（速報）(1) -5 歳・発達障害児への ICT 遠隔支援の問題・目的・方法- 日本特殊教育学会第 58 回大会（福岡・リモート開催）2020 年 9 月 19-21 日（ポスター発表）

杉山志津枝・長崎勤・伊藤和佳・板倉達哉・吉井勘人(2020)双方向メディア（Zoom）を用いた発達支援・実習の試み（速報）(2) -音楽模倣遊びの分析による障害特性の理解と遠隔支援・実習の可能性の検討- 日本特殊教育学会第 58 回大会（福岡・リモート開催）2020 年 9 月 19-21 日

（ポスター発表）

長崎 勤・伊藤和佳・吉井勘人(2020) 包括的発達支援プログラムの開発と実践(8)―「カルピス」カフェごっこにおける役割理解と協同活動の発達支援―日本発達心理学会第 32 回大会論文発表集 29AM2-2F-OS1

伊藤和佳・長崎 勤・吉井勘人(2020)包括的発達支援プログラムの開発と実践(9)－「おおかみと 3 匹の子やぎ」の劇遊びによるダウン症児の物語理解・役割理解・心の理解－日本発達心理学会第 32 回大会論文発表集 29AM2-2F-OS2

船木遙香・牛島智子・長崎 勤(2020)高機能自閉スペクトラム症幼児の「心の理解」の発達支援.日本発達心理学会第 32 回大会論文発表集 29PM3-3B-PS1.

長崎 勤・吉井勘人・板倉達哉・若井広太郎・伊藤和佳(2020)インクルーシブ保育での障害児の子供との関わりのアセスメントと支援プログラムの開発. 社会的認知研究会・発表資料.(2020 年 11月 16 日、筑波大学附属大塚特別支援学校)

長崎　勤・伊藤和佳(2021) インクルーシブ保育での障害児の子供との関わりのアセスメントと支援プログラムの開発:5 歳自閉症T 児における保育園での子供同士の関わり. 2020 年度長崎研究室臨床報告会・発表資料(追加) (2021 年 2 月 12 日実践女子大学)
浦本愛・伊藤和佳・安部瑞帆・長崎　勤(2021)知的障害児・自閉症児の「カルピス」づくりと劇あそびの役割理解の支援における垂直的・水平的越境活動.第 5 回カルピス・セミナー発表資料

＜シンポジウム等＞
奥村桃子・伊藤和佳・長崎　勤・吉井勘人・田島信元(2020)相互行為論による発達理論と発達支援方法論の構築―垂直的・水平的越境活動による発達と支援－ 日本発達心理学会第 32 回大会(ラウンドテーブル)論文発表集 30AM1-1E-RT13.
板倉達哉・若井広太郎 ・吉井勘人・長澤真史・柄田毅・長崎　勤(2020)外部専門家による支援の再考-発達的視点に基づくコンサルテーション- 日本発達心理学会第 32 回大会(ラウンドテーブル)論文発表集 29PM2-1D-RT7.

⑥ 今後の展開・継続性について
今年度もプログラム開発、障害児への支援プログラムの適用、典型発達児での発達研究を継続する予定である。